

伊能小図（旧海兵）の調査レポート

渡辺 一郎*¹

谷村聖二郎*²

1. はじめに

伊能忠敬が日本全国を実測して作成した「日本地図」は伊能図といわれている。約200年近く前に作られた伊能図の素晴らしさは、文久年間に日本沿岸の測量のため来日した英国軍艦が、伊能小図を幕府から貰って測量せずに帰った話でも有名であるが、その精度は緯度1度の長さが今日の計測値に比べ、1/1000の誤差しかないほど正確なものである。

伊能図は、忠敬56才から72才までの12年間に、殆ど地球を一周する距離を歩いて作られたもので、彼の努力に敬服し、図の美しさに感服する。

筆者渡辺はこれまでの文献を参考にしながら、現時点における伊能図の所在と現況について調査を行い研究ノート¹⁾を刊行したが、この中に、記録で存在が確認されながら所在がわからない伊能図として13件を挙げている。このうちの伊能小図（旧海兵）を求めて、筆者谷村が江田島、宮島及び大三島を追跡調査した。ちなみに、文政4年伊能小図の3枚揃いは英国にあって日本には見当たらない。

2. 伊能図

数次にわたり幕府に上呈された伊能図の種類とその数は膨大なものであるが、その殆どは大谷亮吉著「伊能忠敬」²⁾（岩波書店、大正6年）で知ることが出来る。これを出発点として、秋岡武次郎の論文「伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するものの若干」³⁾（地学雑誌、昭和42年）で繋いでみる。

今回の対象は、文政4年（1821年）に最終上呈された「大日本沿海輿地全図」のうちの伊能小図である。縮尺は1/432,000、曲尺3分を1里としている。日本全体を3枚で構成しているので、1枚の図幅は5尺2寸9分という相当に大きなものである。

所で、文政4年の伊能図は、大図214枚、中図8枚、小図3枚からなっていたが、幕府から明治政府に引き継がれた後、明治6年（1873年）の皇居炎上の際焼失した。その後伊能家にあった副本が政府に献納されたが、これも大正12年（1923年）の関東大震災で灰となったので、正式な伊能図はすべて失われた。

しかし、上呈から最後の焼失まで約100年の間に、必要に応じて副本や写本（副本からの複写）が作られており、これらも伊能図に含めて調査の対象としている。

ただし、副本や写本といっても、紙に針穴を開けて忠実に手書きされた地図であって、木版で刊行された地図等は含まない。

*1 日本地図資料協会会員、(株)サン・コミュニケーションズ社長、東京都

*2 海上保安大学校名誉教授、呉市

次に、文献により小図3枚を追跡すると、

(1) 大谷著書(大正6年時点)では、

副本は ① 東京帝国大学に 1部(明治7年伊能家より政府に献納したもの)

② 静岡県浜松町内田令太郎の所蔵 1部

(足立信頭の後裔の許に伝わったものを近年購入)

写本は ① 英国海軍省に 1部(文久年間幕府が英国測量艦長に与えたもの)

② 大槻如電の所蔵 1部(松平伊勢守が命じて謄写させたもの)

③ 維新の前後に航海上大いに実用に供せられ、諸藩具眼の士が競ってこれを謄写したもの 多数

木版は、慶応明治の頃、開成所において本図をもとに増補して刊行された。

(2) 秋岡論文(昭和42年時点)によると、

副本 ① 関東大震災のため焼失。

② 内田氏の子息六郎氏により、第2次世界戦争以前に江田島の海軍兵学校に寄贈された。昭和30年代に南波氏が海上自衛隊第一術科学校で調べてもらったが、見当たらなかった。

写本 ① 英国海軍省にある。

② 大槻氏の孫茂雄氏が、終戦直前に東京静嘉堂文庫に蔵書を譲られたが、小図がその中に含まれていたかは不明である。

以上の他、南波松太郎氏が昭和31年に東京大屋書房より購入された小図2枚の記載がある。これは後に神戸市立博物館に寄贈されるが、本州中央部を欠いている。

(3) 渡辺研究ノート(平成5年時点)では、

副本 ② 国書総目録(岩波書店:補訂版第1刷 1989年9月)⁴⁾に「伊能忠敬実測調製日本全図(旧海兵蔵)3葉」とある。戦後の資料に伊能図の記載があり、これと小図との関係を確認する必要がある。

写本 ① 英国海軍省ではなく、英国グリニッチ国立海事博物館(National Maritime Museum)に現存することを、筆者渡辺が確かめた。この小図3枚の原寸大のカラーコピーを研究用として有料で依頼中である。

② 最近の静嘉堂文庫の目録には見当たらない。

以上の文献の追跡調査によれば、写本③の航海用の海図として艦船で実用された多数の小図についての記載は、大谷著書だけで以後出てこない。結局、文政4年伊能小図3枚揃いは、英国だけあって日本国内には見当たらないことになる。僅かな可能性として、副本②を旧海軍兵学校、現在の海上自衛隊第一術科学校に迎えることが残されており、これが今回の調査の動機となった。

3. 海上自衛隊第一術科学校（広島県安芸郡江田島町）における調査

(1) 日 時 平成6年6月29日（水）

(2) 教育参考館

旧海軍兵学校教育参考館は大正14年に生徒館の中で始まり、昭和11年に堅固美しい現在の参考館が造られた。旧海軍兵学校の校域には、海上自衛隊幹部候補生学校、第一術科学校及び自衛隊江田島病院があるが、教育参考館を管理しているのは第一術科学校である。

教育参考館館長 新宮武雄氏に、第一術科学校研究部企画室長 二等海佐 川口正之氏を通じて、上記調査を2日前に予め依頼した上で同校を訪れ、関係の文献のコピー等を渡して説明し、参考館応接室において館長から次のような所見を伺った。

(3) 資料調査

① 戦前の所蔵品目録は、海軍兵学校教育参考館図録（昭和9年6月30日発行）⁵¹ に詳しいが、この中に伊能小図は無い。この図録は非売品で、当時の関係者に配られたようである。和綴じ帙入り。

② 上記図録の後、昭和9年6月から昭和20年8月迄の海軍時代の教育参考館の所蔵品目録は見当たらない。

③ 現在の教育参考館の所蔵品目録に関する印刷物は無い。帳簿として教育参考館寄付受台帳があるが、これは昭和31年1月に旧海軍兵学校が連合軍から返還されて、術科学校が横須賀から江田島に移転してから後の海上自衛隊の帳簿で、この中に伊能小図は無い。

(4) 現物調査

現在の教育参考館の所蔵品（展示品及び収蔵品）の中に、伊能小図は無い。

(5) 聞き取り調査

① 昭和20年8月の終戦後、呉市周辺に米軍が進駐し、後に英豪軍に交代した。海軍兵学校も接收され、約60年の歴史を閉じることとなる。これに先立ち、参考館所蔵品の散逸を恐れ、当時の関係者が苦心の末、数個所に疎開させた。（この項後述）

② 終戦後、軍関係書類は日本全国にわたって、殆ど焼却処分されたと言われるが、兵学校でも三日三晩にわたって、グランドで燃やされたと言われている。

③ 昭和20年9月17日の台風による大水で呉市周辺は大きな被害を受けた。この時、参考館の地下も水没し、泥にまみれた資料は処分されたと言われる。

④ 現館長新宮氏は3代目で、就任6年目を迎える。これまでの記憶の中に、伊能小図に関するものは無いとのことであった。

(6) 聞き取り調査（続き）

当日午後、2代目館長狩山文治氏（昭和52年12月～平成元年3月在任）が来校することだったので、再度訪問し、参考館応接室で聞き取り調査を行った。内容は殆ど上記

の3代目館長新宮氏と同じであったが、終戦後の所蔵品の疎開について更に詳しく聞くことが出来たので、次にまとめる。

- ① 進駐軍の接收を恐れ、当時の教官達が苦勞して参考館所蔵品の疎開先を検討した。神社であれば大丈夫ではないかということで、厳島神社（広島県佐伯郡宮島町）と大山祇神社（愛媛県越智郡大三島町）の二箇所を選んで交渉し、所蔵品を移した。他に生徒の実家等もあったやに聞く。
- ② 保管を依頼した所蔵品のリストは、参考館には残っていない。
- ③ 昭和31年に術科学校は江田島に移転してきた。この機会に、再び参考館を整備しようということになり、両神社に返却を求め所蔵品が戻ってきた。横山大観の正気放光（富士山）の絵や、古代兵学書（鷲見文庫及び野沢文庫）がそれである。しかし伊能小図は記憶にない。

(7) 第一術科学校図書館

念のため図書館も調査することとした。

参考館と同じく図書館長に2日前に連絡し、伊能小図の存在を予め確かめて貰った。当日館長不在で、図書係長 山佐信子氏に伺ったところ、書庫を含め伊能小図は見当たらないとのことであった。

(8) 調査結果

伊能小図（旧海兵）は第一術校では発見されなかったが、終戦後の神社へ疎開の話が新たに出てきた。この中に小図が含まれていないか。しかし、その時のリストが現在の参考館には残っていないので、直接両神社を訪れて確かめることとした。

4. 厳島神社（広島県佐伯郡宮島町）における調査

(1) 日 時 平成6年7月29日（金）

(2) 宝物館

ここでは、平清盛の平家納経33巻が有名である。展示品及び収蔵品の中に、伊能小図は無い。

(3) 社務所

厳島神社彌宜 飯田楯明氏は昭和37年からこの職に就かれており、宝物館の責任者でもある。飯田氏に伊能小図の概略を説明し、神戸市立博物館及び英国海事博物館の小図縮尺カラーコピーを示して伺ったが、伊能小図を見たことは無いとのことであった。

また、旧海兵の所蔵品を神社に預けた経緯について、第一術校側の話をお聞かせした所これも知らないとのことであった。

しかし、数日後の飯田氏の書簡で次のような新たな事実が判明する。何らかの手掛かりを求めて、古い神社日誌を調べていくうちに、関連の記事を発見されたのである。

巖島神社日誌(抄)

昭和20年9月22日(曇)

1. 午前11時、海軍兵学校教育参考館理事、海軍教授姉崎岩蔵氏、数名ノ水兵引率左記物件奉納ノタメ来社、野坂彌宜、安田主典応接ノ上、物件受領ス。

記

1. 東郷元帥書 大二点

(途中略)

1. 日高大将遺愛琵琶 一点

以上二十八点

昭和30年1月10日(吹雪)

1. 海上自衛隊呉地方総監部より経理補給部長富崎作氏外式名来社、旧海軍兵学校より奉納の横山大観画伯筆富嶽の図外二十七点寄贈方願出あり宝物館に於て宮司飯田権彌宜立会現品受領して辞去す。

約40~50年前の日誌から、「参考館の貴重品を海兵から神社に奉納し、後年自衛隊側が全品寄贈受けした」ことが明瞭になった。

但し、伊能小図はこの中に含まれていなかった。当時の海兵にとって貴重品は元帥大将の物であり、横山大観の絵一点を例外とする。

5. 大山祇神社(愛媛県越智郡大三島町)における調査

(1) 日時 平成6年8月4日(木)

(2) 国宝館、紫陽殿、海事博物館⁶⁾

全国の国宝・重要文化財の指定を受けた武具類の8割がここに保存展示されている。また、昭和天皇の海洋生物研究に使用された葉山丸が海事博物館に永世保存されている。ここの展示品や収蔵品の中に伊能小図は無い。図録大山祇神社⁷⁾の中にも記載は無い。

(3) 社務所

大山祇神社彌宜 田中忠義氏に、大三島町元助役 越智好人氏を通じて、予めこの調査の趣旨を説明した上で同神社を訪れた。田中彌宜は昭和36年からこの職に就かれており、宝物館等の責任者でもある。

田中氏に伊能小図の概略を説明し、神戸市立博物館及び英国海事博物館の小図縮尺カラーコピーを示して伺ったが、「伊能小図は見たことが無い。旧海兵が所蔵品を神社に預けた事については承知している。そして、預かった品物は後日返還したと聞いている」とのことであった。

所で、上記葉山丸は戦争末期に海軍兵学校に預けられたが、終戦後、陛下の船を進駐軍に使用されるのを遺憾として、海兵は大山祇神社に保管を依頼した。昭和20年9月16日頃江田島から大三島まで回航する旨の文書が残っている。その後葉山丸は、英豪軍に接收、

昭和24年暮に神社に返還、陛下に献上、海上保安庁巡視艇に編入して時々御利用、という経過を辿って、御採集船は昭和31年「はたぐも」昭和47年「まつなみ」と変わっていく。葉山丸は廃船となった後、昭和43年に大三島海事博物館で永久保存となった。

海軍兵学校教育参考館の貴重品を大山祇神社に疎開させた経緯も、葉山丸と同様であろうと思われる。田中彌宜の話によると、宝物殿の刀剣甲冑を進駐軍が武器とみなして接収することを恐れ、刀剣にはグリスを塗ったり菰で巻いたりして、民家に隠した。参考館からの預かり品も軍の物ということで民家に隠したということである。

6. 別の伊能図について

(1) 第一術科学校教育参考館

海軍兵学校教育参考館図録（1934年6月発行）p.27に、別の伊能図があった。それは「伊能忠敬測量原図」で〔伊能忠敬自筆ノ神奈川付近ノ地図ナリ 左ハ伊能忠敬筆ノ歌（写）並ニ伊能家蔵書目録写ニシテ此二者ハ何レモ古川庄八氏遺族ノ寄贈ニカカル〕との説明がある。寄贈者は佐藤鉄太郎中將。写真3葉付。

国書総目録（岩波書店：補訂版第1刷 1989年9月）p.282にある「伊能忠敬実測調製日本全図（旧海兵蔵）3葉（写真）」との関係が気になる所である。

この2つの資料にある伊能図は共に参考館に現存しない。

(2) 呉市入船山記念館（広島県呉市幸町4-6）

この記念館は、旧呉鎮守府司令官官舎（県重文）や歴史民俗資料館などから成っている。旧海軍関係の資料の中に、伊能小図が万一にもあればという僅かな期待で訪れたが、ここに伊能小図は無い。館長の本原弘樹氏に収藏品について尋ねたところ、別の伊能図があった。それは「浦島測量の図」で〔文化3年（1806年）3月に伊能忠敬ら測量方一行が呉浦周辺の測量を実施した時の様子を描いたもの〕との説明がある。宮尾幾夫氏提供。サイズは28cm×400cmくらいで、彩色の絵図である。

7. むすび

伊能小図を求めて、江田島、宮島及び大三島と歩いた。約170年も前に作成された地図を求めて、約50年前の存否を確かめようとしたわけであるが、結局発見されなかった。

秋岡論文にあるように、文政4年の伊能小図副本が第2次世界戦争以前に海軍兵学校に寄贈されたことは確かであろう。これが何処に行ったかを、出来るだけ客観的資料で追跡することが今回のテーマであった。それはある程度出来たと思われる。

特に、終戦後に貴重品を神社に疎開させた件について、神社側からの資料により、その内容が確認できたこと、後年それらが返還されたこと、その中に伊能小図は含まれていなかったことが確かめられた。

とすると、残るのは終戦直後の混乱の中で行われた書類焼却か、水害時の書類の処分かで失われた可能性が最も大きい。この流れの中で、何処かで生き延びて、何時の日か世間に小図が顔を出すことを期待するのは夢であろうか。

ここまで書いてきて思う事は、敗戦直後の関係者の御苦労である。それは、今からでは想像もできない程大変であったろうと思われるが、残念さ、虚しさ、責任感などの緋い交ぜの中での軍関係者の努力と、それを受け止めて9年余も立派に保存した神社関係者に敬意を表したい。

〔謝辞〕

今回の調査に関して御協力頂いた、海上自衛隊第一術科学校校長落合海将補、川口二佐参考館長新宮氏、前館長狩山氏、大三島町役場元助役越智氏に感謝します。また、貴重な資料を頂いた巖島神社飯田彌宜、大山祇神社田中彌宜に感謝します。

参考文献

1. 渡辺一郎 : “伊能忠敬作「日本全図」(伊能図)の所在と現況について”
研究ノート(非売品)1993年7月. p. 22, 39
2. 大谷亮吉 : “伊能忠敬”岩波書店, 大正6年. p. 609~610
3. 秋岡武次郎 : “伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するものの若干”
地学雑誌, 76巻6号, 昭和42年. p. 43~44
4. 岩波書店 : “国書総目録”岩波書店, 1版 1963年11月18日,
補訂版第1刷 1989年9月6日 p. 282
5. 海軍兵学校 : “教育参考館図録”海軍兵学校, 昭和9年6月30日
印刷所 東京市小石川区音羽町 合名会社双文館
6. 三島喜徳 : “図録「大山祇神社」”大山祇神社, 平成5年4月再版
7. 三島喜徳 : “昭和天皇御採集船葉山丸”大三島海事博物館, 平成元年3月再刊

別紙

厳島神社日誌（抄録）

昭和20年9月22日（曇）

1. 午前十一時、海軍兵学校教育参考館理事、海軍教授姉崎岩蔵氏、数名ノ水兵引率左記物件奉納ノタメニ来社、野坂彌宜、安田主典応接ノ上、物件受領ス、

十一時三十分辞去セラル、

記

- | | |
|-----------------|-----|
| 1. 東郷元帥書 | 大二点 |
| 1. 米内大将書 | 大二点 |
| 1. 鈴木貫太郎大将書 | 中二点 |
| 1. 島田大将書 | 中二点 |
| 1. 山本英輔大将書 | 小二点 |
| 1. 黒井大将書 | 小一点 |
| 1. 広瀬中佐西伯利亚旅行写真 | 中二点 |
| 1. 佐久間艇長遺言書写 | 小一点 |
| 1. 横山大観筆富岳之図 | 大一点 |

軸物

- | | |
|------------|----|
| 1. 東郷元帥書 | 二点 |
| 1. 西郷従道元帥書 | 一点 |
| 1. 伊藤元帥書 | 二点 |
| 1. 上村大将書 | 一点 |
| 1. 谷口大将書 | 一点 |
| 1. 勝海舟書 | 二点 |

其他

- | | |
|------------------|----|
| 1. 乃木大将遺愛薙刀 | 一点 |
| 1. 谷口大将即位式着用ノ冠並纓 | 二点 |
| 1. 日高大将遺愛琵琶 | 一点 |

以上二十八点

昭和30年1月10日（吹雪）

1. 海上自衛隊呉地方総監部より経理補給部長富崎作氏外式名来社、旧海軍兵学校より奉納の横山大観画伯筆富嶽の図外二十七点寄贈方願出あり宝物館に於て宮司飯田権彌宜立会現品受領して辞去す。